

近世イラン・イラクの聖者廟に対する本の寄進と廟附属図書館の役割

神田 惟（東京外国語大学）

図書館の形成と書物管理の実践は、20世紀初頭以前の西アジアにおける知的・文化的・宗教的環境の構築において、重要な役割を果たしてきた。2000年代以降、イスラーム史研究においては、写本や財産目録といった「モノ」に着目した書物文化の研究が活発になり、特にアラブ史やオスマン史、イスラーム美術史の分野では顕著な研究成果が蓄積されている。しかし、イランをはじめとするペルシア語文化圏の図書館や書物文化に関する研究は、依然として十分に進んでいないのが現状である。

本発表は、こうした研究上の空白を補うことを目的とし、その一環として、16世紀初頭～19世紀末（サファヴィー朝期～カージャール朝期）にイラン・イラクの聖者廟へ寄進された写本や印刷本に着目する。具体的には、それらの書物がどのような社会的階層の人々によって寄進され、いかに展示・参照・活用され、またどのように管理されてきたのかを明らかにする。特に、寄進された書物の言語・内容・外観（装丁、字体、頁数、挿絵の有無など）・来歴に注目し、それらが聖者廟（本発表では広義での「ミュージアム」とみなす）の財産となった後、参詣者を介してどのように受容されてきたのかを考察する。この際、現存する写本・印刷本に加え、寄進文書や財産管理の記録などを分析することで、多角的な検討を試みる。

さらに本発表では、聖者廟の参詣者による寄進と、寄進財の展示・参照・活用、および聖者廟内での管理が、聖者廟周辺地域の文化の形成にどのように寄与したのかを検討する。その一環として、ペルシヤ湾経由でイランへと輸出され、同地で珍重された中国製の陶磁器の事例を取り上げ、書物との比較を通じて、寄進財の管理、受容と流通の特性を明らかにする。とりわけ、現地の陶工による、寄進された景德鎮窯の青花（染付磁器）へのアクセシビリティ、模倣の問題について取り上げる。

「優れた作品の不足なきよう」 —トスカーナ大公国における門外不出の美術コレクション

古川萌（名古屋工業大学）

中央イタリアの都市フィレンツェは、ヨーロッパのなかでも早い時期からルネサンス美術が花開いた場所としてよく知られている。その発展は、自然主義的表現や遠近法の発達にとどまらず、そうした美術作品をいかに都市のソフトパワーとして利用するかといった枠組みの確立についても突出していた。これを積極的に統治に用いたのが、フィレンツェ共和国、のちにはトスカーナ大公国を治めたメディチ家の面々である。

1563年には、初代トスカーナ大公であったコジモ一世・デ・メディチのもと、西洋世界最初期の美術アカデミーであるアカデミア・デル・ディセーニョが設立され、公的な援助のもと質の高い美術作品を効率的に制作する基盤が整えられた。また16世紀末には、メディチ家の古代コレクションや当代屈指の作品を一堂に集めるための展示室「トリブーナ」の整備も進められた。

このような動きと軌を一として、1604年、トスカーナ大公の諮問機関である枢密顧問団により、優れた美術作品をトスカーナ外に持ち出すことを禁止する法が制定される。そこでは、顧問団が指定する芸術家17名（のちに2名追加されて全19名）の作品については、トスカーナのみならず、フィレンツェ外に持ち出すことも禁じられていた。こうして確保された美術コレクションが、現在のウフィツィ美術館所蔵品の核となっていくこととなる。しかし、リストに挙げられた19名の芸術家たちは大部分がトスカーナ出身だとはいえ、なかにはとくにトスカーナにゆかりがあるわけではない人物も含まれていた。そのような芸術家の作品をフィレンツェに留め置くことで、どのような効果が期待されていたのだろうか。

したがって本発表では、この「門外不出リスト」に着目し、その目的や選定基準を探ることで、「国を代表するコレクション」の起源に迫りたい。リストに挙げられている芸術家19名とフィレンツェとの関係を精査することによって、当時のトスカーナ大公国が目指していたイメージ戦略が浮き彫りとなるだろう。時代が下って近代になると、ナショナル・アイデンティティと結びついたミュージアムが台頭するが、そうした動きのスタート地点として本「門外不出リスト」を提示するのが、本発表のねらいである。

京都帝国大学文学部陳列館における考古資料の収集・研究・展示

吉井秀夫（京都大学）

京都帝国大学文科大学（1919年より文学部）陳列館は、1914年に竣工した日本最初の大学博物館である。その後、3次にわたる増築を経て、1929年に陳列館は口の字形の建物として完成した。陳列館には、陳列室と共に史学科の各研究室がおかれ、史学研究会の揺籃の地とみることもできよう。

本報告では、陳列館に収蔵・展示された資料のうち、考古資料の収集・研究・展示について検討をおこないたい。文科大学設立以前からはじまった京都帝国大学における考古資料の収集は、陳列館の竣工と考古学講座の開設（1916年）を契機として本格化した。1945年までに陳列館に収集された考古資料の出土地は、日本各地だけではなく、朝鮮・中国をはじめとする東アジア、さらにエジプトやヨーロッパ、南米に至る世界各地にわたる。これらの考古資料のうち、特定のコレクションや地域の資料についての収集経緯については、これまでも検討されてきた。しかし、通時的な収集過程の全容は、必ずしも明らかにされてきていない。そこで、本報告では、『京都大学文学部陳列館考古図録』（初版1923年、増訂新版（1928年）、増訂三版（1930年））・『京都大学文学部陳列館考古図録』続編（1935年）や、数次にわたって発行された絵ハガキなどを主たる手がかりとして、世界各地の考古資料が、いつ・どのように陳列館に収集され、どのような研究に用いられたのかを検討する。

次に、収集された考古資料が、陳列館の中でどのように展示されたのかを検討する。陳列館における考古資料の展示は、日本・朝鮮・中国の考古資料を比較展示する空間と、エジプト・ヨーロッパ各地で出土した考古資料を展示する空間に分かれていた。そして展示室は、一般への公開施設であるだけでなく、学生たちの教育施設としての機能を担っていた。その実態を検討することを通して、京都帝国大学文学部陳列館の果たした歴史的意義について考えてみたい。

歴史博物館が再構築する南北分断と朝鮮戦争の起源

——現代韓国における歴史認識の相克に関する一考察——

パトリック・フィアターラ（京都大学）

本報告は、大韓民国（以下：韓国）の歴史博物館における南北分断（1948年）および朝鮮戦争（1950～53年）の起源の再構築を主題とし、現代韓国における歴史認識の相克に関する考察を行う。今年には第二次世界大戦の終戦および朝鮮半島の解放 80 周年の年であり、朝鮮戦争勃発 75 周年の年でもある。現在の韓国は、民主化以降の第 6 共和国の政治体制が激しく揺らいでおり、政治・社会的対立が深刻化する一方にみえる。この対立の裏にある重要な一要素となるのは、近現代史の歴史認識の相克である。

韓国で解放後の時期がモニュメントの領域を超え、歴史博物館の展示対象となったのは、1980 年代後半以降のことであり、時期的に民主化と一致する。本報告では以下の 3 点を中心に論じる。第一に、民主化以前の南北分断と朝鮮戦争の史学研究の動向およびその集合的記憶を概観する。第二に、民主化以降の南北分断・朝鮮戦争関連の博物館の建設過程およびその特徴を整理する。第三に、首都圏を中心とした国立・民間の歴史博物館の建設過程および常設展示の分析を通じて、民主化以降の歴史認識の変遷過程およびそれをめぐる相克を明らかにし、歴史研究と公共の記憶の関係性に関する考察を行う。

具体的には、独立記念館（1987 年開館）の常設展示の改編に触れながら、戦争記念館（1994 年開館）、大韓民国歴史博物館（2012 年開館）、大韓民国臨時政府記念館（2022 年開館）の国立博物館と、白凡・金九記念館（2002 年開館）、韓国近現代史博物館（2011 年開館）、夢陽呂運亨生家・記念館（2011 年開館）、朴正熙大統領記念館（2012 年開館）、植民地歴史博物館（2018 年開館）と李承晩大統領記念館（未建設）の民間博物館を分析する。

以上を通じて、以下の 2 点を解明する。第一に、国家の公共の記憶をめぐる政治的闘争の展開である。民主化以降の韓国では、近現代史の歴史と記憶が常時的に激しい論争の対象となり、左右間の深刻な「非対称な記念」(asymmetric remembering) が見られる。本報告から明らかになるように、国立歴史博物館の建設と運営はその「歴史戦争」の主戦場と捉えることができる。第二に、国家と民間団体の歴史認識の相克を検証することにより、民間の歴史博物館はどのような建設され、運営されているのかを明らかにする。国立と民間の歴史博物館の間にはどのような相違が特定できるのか、なぜそれが政治・社会的対立に拍車をかける一方かを明らかにする。

ミュージアム・オリエンタリズムの脱構築に向けて ——トリノ東洋美術館とローマ文明博物館の取り組みを中心に

村田麻里子（関西大学）

近年、ヨーロッパのミュージアムにみられる脱植民地化の潮流の一環として、「他者」の文化を展示・表象してきたこれまでのミュージアム実践が、見直されつつある。この発表では、21世紀に入ってヨーロッパのミュージアムがアジアの美術や文化を扱い、展示することの意味について、トリノ東洋美術館（Museo d'Arte Orientale）とローマ文明博物館（Museo della Civilita）の取り組みを中心に考える。

ヨーロッパがアジアの文化や美術を本格的に収集しはじめるのは、交易路が一気に拡大した大航海時代である。その後、博覧会の時代を経て、ヨーロッパの主要都市に東洋美術のコレクションや、それらを展示するミュージアムが次々に現れる。イタリアでも、19世紀以降、ジェノヴァ、ヴェネツィア、ローマ、トリノ、トリエステといった都市に、東洋美術を収蔵する美術館が誕生した。

これらの美術館が、長きに亘って貴重なコレクションの散逸を防ぎ、イタリア市民にアジアの文化や美術に出会う機会を提供してきたことは間違いない。しかし、膨大な量の収蔵品の存在は、当時の「想像されたオリент」への憧憬や欲望を物語っており、そうしたオリエンタリズムは、コレクションにも、収集・保存・展示というミュージアムの基本的な所作にも深く刻み込まれている。とりわけ初期のコレクションは、熱心な美術商や裕福なコレクターによって発掘あるいは購入されて海を渡ってきたものであり、場合によっては略奪されたものも含まれている（この過程には日本の美術商も絡んでいる）。なかでも仏像をはじめとする「仏教美術」——既にこの呼称がそれらを信仰から切り離して純粋に美的に鑑賞する慣習の登場を物語っている——の多くは、当時の西洋のまなざしを満足させるために、元の文脈から引き剥がされ、断片化され（仏像の頭と体は文字通り分離され）、分類され、展示されてきた。

このように歴史的優位にあった西洋が「他者」の文化を自らの視点で無邪気に展示する行為は、これまでに多くの研究者によって批判されてきた。同様に、その背後にある東洋と西洋を線引きする思考そのものや、西洋の東洋に対する家父長的な認識についても、欧米でもアジアでも、度々指摘されている。しかし問題は、ではミュージアムという現場ではどうすればよいか、である。これまでと同じモノやコレクションを扱いながら、脱植民地化や脱オリエンタリズムの意図を、ミュージアムの空間と展示でどのように表現できるのだろうか。

発表者はトリノ東洋美術館で調査を行い、またローマ文明博物館との共同企画展示に寄稿している。この発表では、現代アート、来歴調査、科学調査等の手法を組み合わせながらこれまでの展示や語りを更新しようとする両者の取り組みを通して、コレクションに染みついたオリエンタリズムを館自らが脱構築しようとする試みについて検討する。